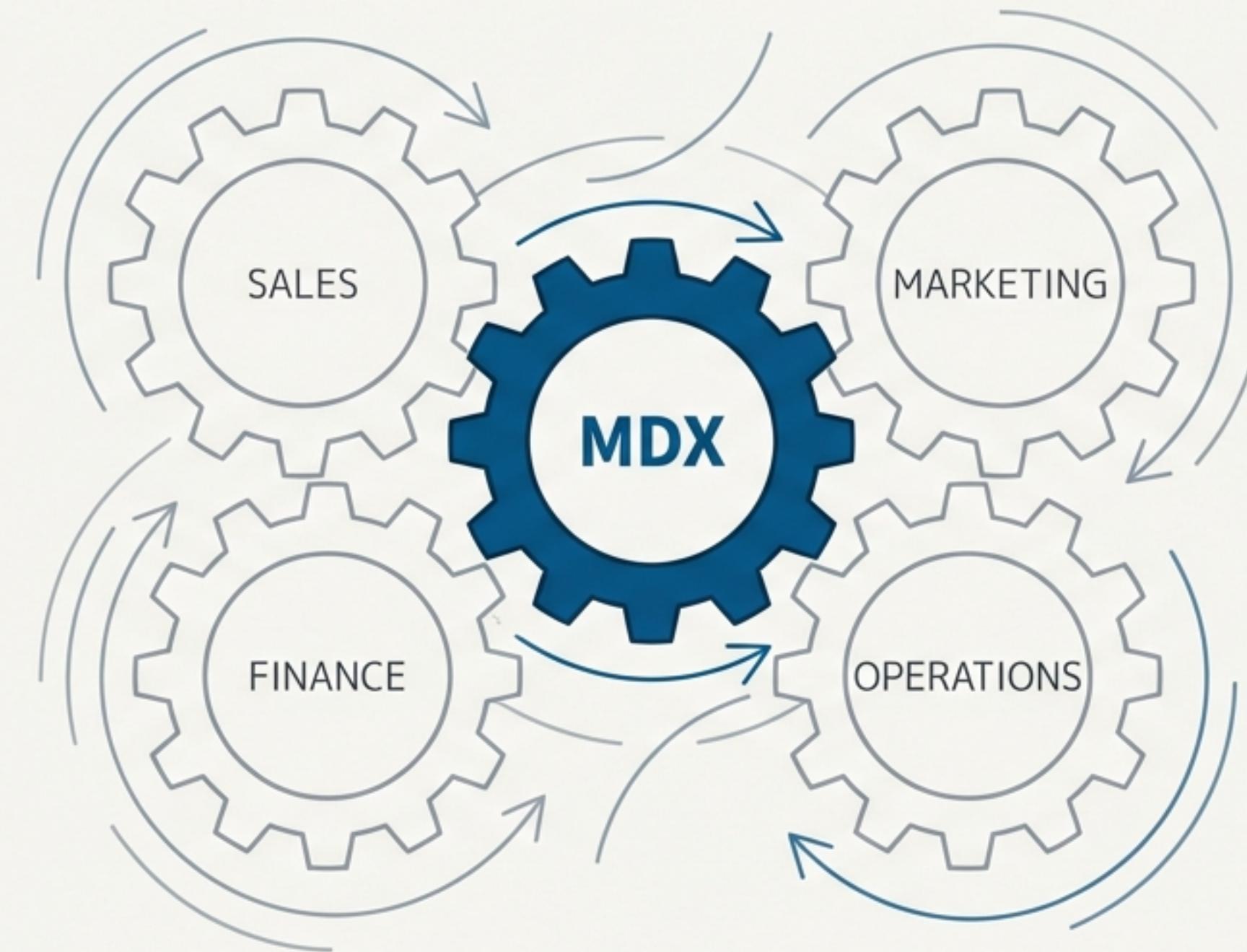


# 2026年度 MDX開発指針：ナイルの成長を加速させる戦略的エンジンへ



単一プロダクト開発組織からの脱却。全社の事業課題を解決するプロアクティブな技術集団への変革。

# MDX変革を駆動する3つの戦略的柱



## 1. 「AIといえばナイル」

全エンジニアがAI活用のプロフェッショナルとなり、開発から運用まで持続可能なAIソリューションを全社に提供。ナイルのAIにおける圧倒的リードーシップを確立する。

## 2. BPOへの挑戦

システム、AI、人手を融合させ、高附加值なソリューションを創出。コストセンターからプロフィットセンターへと転換し、事業成長に直接貢献する。

## 3. フォワード・デプロイド・エンジニアリング (FDE)

エンジニアが事業の最前線へ。「どうすれば良い?」から「これが良い!」へ。現場に深く入り込み、課題解決を主導する提案型開発を実践する。

# なぜ今、変革が必要なのか？単一プロダクト開発から全社最適化への戦略的転換



「かるもーん」への3年間の集中開発により、強固な技術基盤とチームワークを構築。  
この資産を全社に展開するフェーズへ。これまで対応が薄くなっていた事業領域、特にAI導入効果が高い部署への集中対応を開始し、ナイル全体の成長を最大化する。

# Pillar 1: 「AIといえばナイル」の実現



## 開発 - Development

AIエージェントの全エンジニア導入  
コーディングはAIに任せ、エンジニアは  
より創造的で付加価値の高い業務に集中。  
開発プロセスを根本から変革する。



## 人材 - People

全員が「AI導入支援のプロフェッショナル」へ  
現場実践と輪番制を通じ、全エンジニアがビジネス課題  
を理解し、最適なAIソリューションを提案・実装できる  
スキルを習得する。



## 運用 - Operations

持続可能な「運用支援AI」の内製開発  
現場主導の「ノーコード」導入の罠（属人  
化・メンテナンス不能）を回避。エンジニア  
が責任を持つことで、ビジネスの変化に追  
従し続ける「AIのSDGs」を実現する。

## Pillar 2: BPOへの挑戦 – コストセンターからプロフィットセンターへ



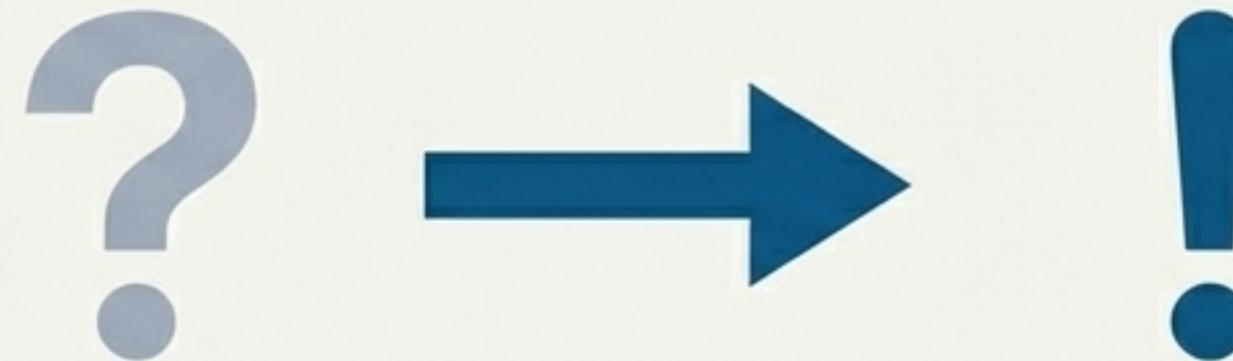
システム + AI + 人手を融合した  
高付加価値ソリューションの提供

- 自動車産業DXサービスBPO: ディーラーDX領域におけるエンジニアリング支援。
- AI開発支援サービスBPO: 我々のAI導入ノウハウを外部へも展開。
- Nyle X Partners支援: パートナー企業へのエンジニアリング支援、コーチング、人材調達支援。

「コストセンターからベネフィットセンターへ」

## Pillar 3: フォワード・デプロイド・エンジニアリング

### - 現場の課題解決を主導する



「どうすれば良い?」「どれが良い?」から「これが良い!」へ

#### 現場実践制度



エンジニアが一定期間、事業部の現場に入り込み、課題を自己洞察。「エンジニアが来てくれてよかったです」と実感できる「置き土産」を残す。

#### 提案型サービス開発



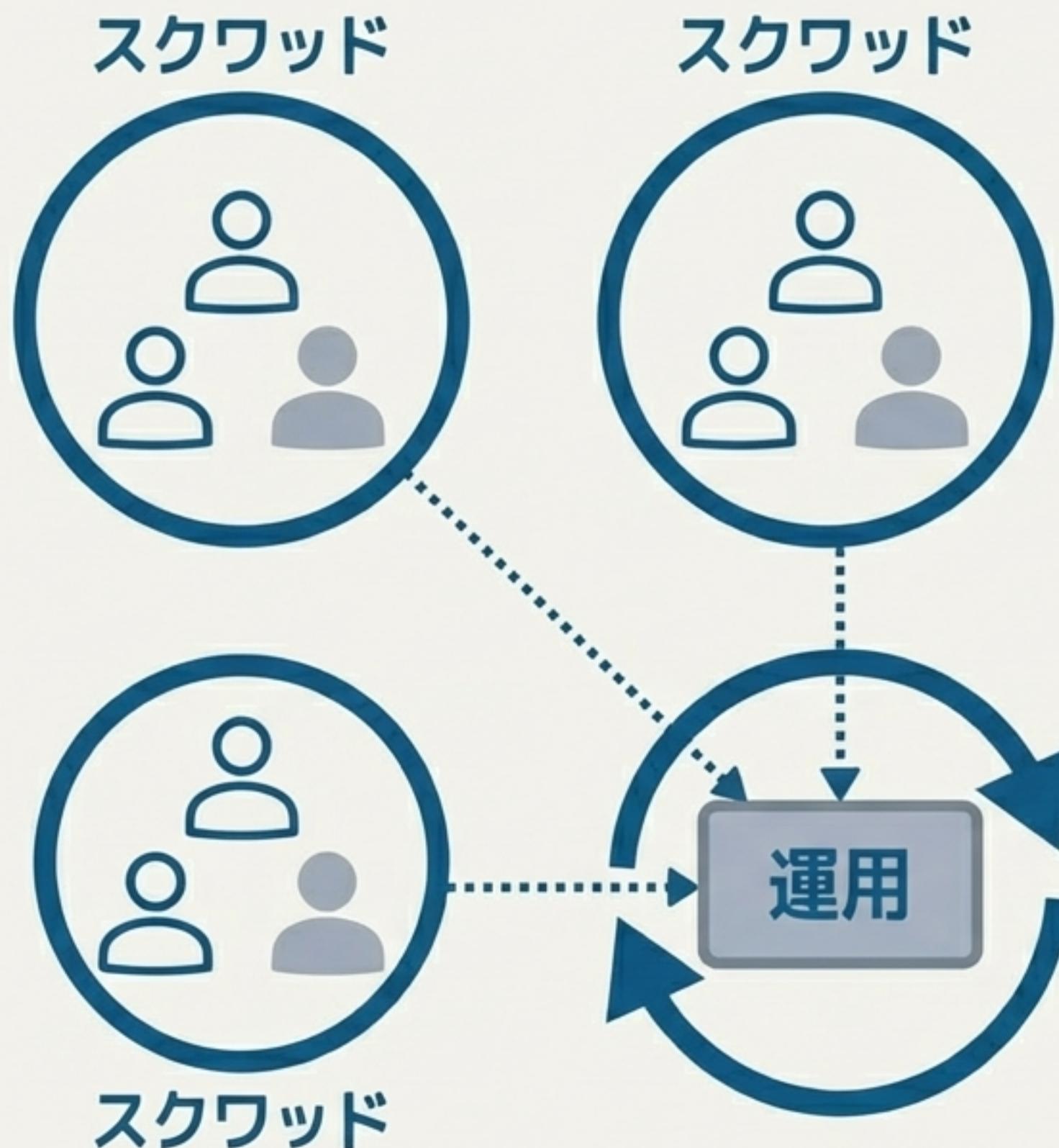
エンジニア自身が提案する「かゆいところに手が届く」サービスを実装。ユーザーにとって本当に使いやすいものを追求する。(例: LayerX社の「バクラク」のような体験を目指す)

#### OSS Maintainer



開発に不可欠なOSS「Laravel Admin」を自社でメンテナンス。開発効率を向上させると同時に、技術コミュニティでの実利と存在感を両立させる。

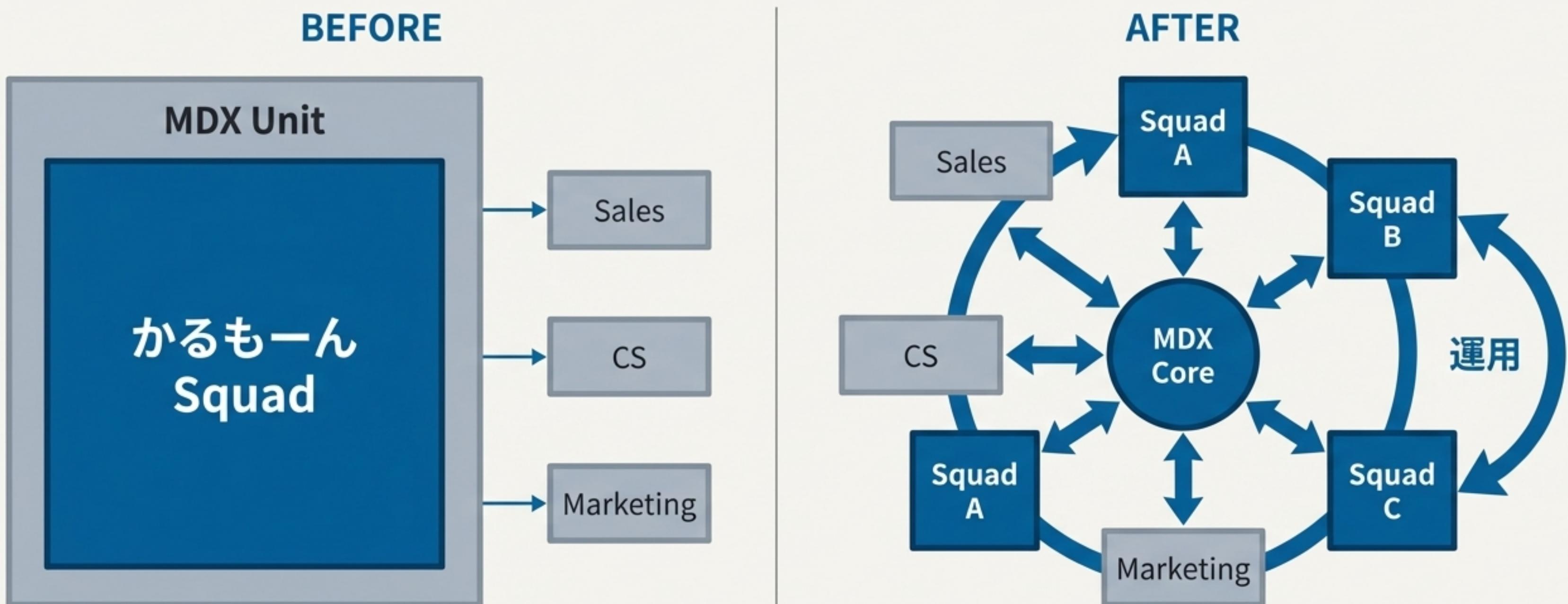
# 戦略を支える組織基盤：スクワッド制の強化とローテーション



- ・継続・強化：スクワッド単位でのミッションを明確化。特定事業領域のエキスパートチームを育成。
- ・少人数チーム：理想は3名、最大5名。機動性と高いコミュニケーションを維持。
- ・属人化の排除：
  - Step 1: スクワッド内での「このタスクは知らない」を解消。
  - Step 2: 運用業務の「ミッション外運用の輪番制」を導入し、「属チーム化」も解消。

安定した基盤の上で、ミッション交換や事業部外協力。  
安定した基盤の上で、ミッション交換や事業部外協力へと発展させ、エンジニアの視野とスキルを拡大する。

# オペレーションモデルの進化：サイロ化からダイナミックな全社支援体制へ



専門性を持つスクワッドが各事業領域を深く支援しつつ、運用業務の共通化とローテーションにより、組織全体の知識レベルを底上げし、ボトルネックを解消する。

# 生産性を最大化する開発環境の整備

## AIによるドキュメント整備



ドキュメントが古くなりがちで、情報のキャッチアップに時間がかかる。

AIを活用した執筆・更新支援を導入。エンジニアの隙間時間を活用し、常に最新で質の高いドキュメントを維持する。

## `laravel-admin`からは逃げられない

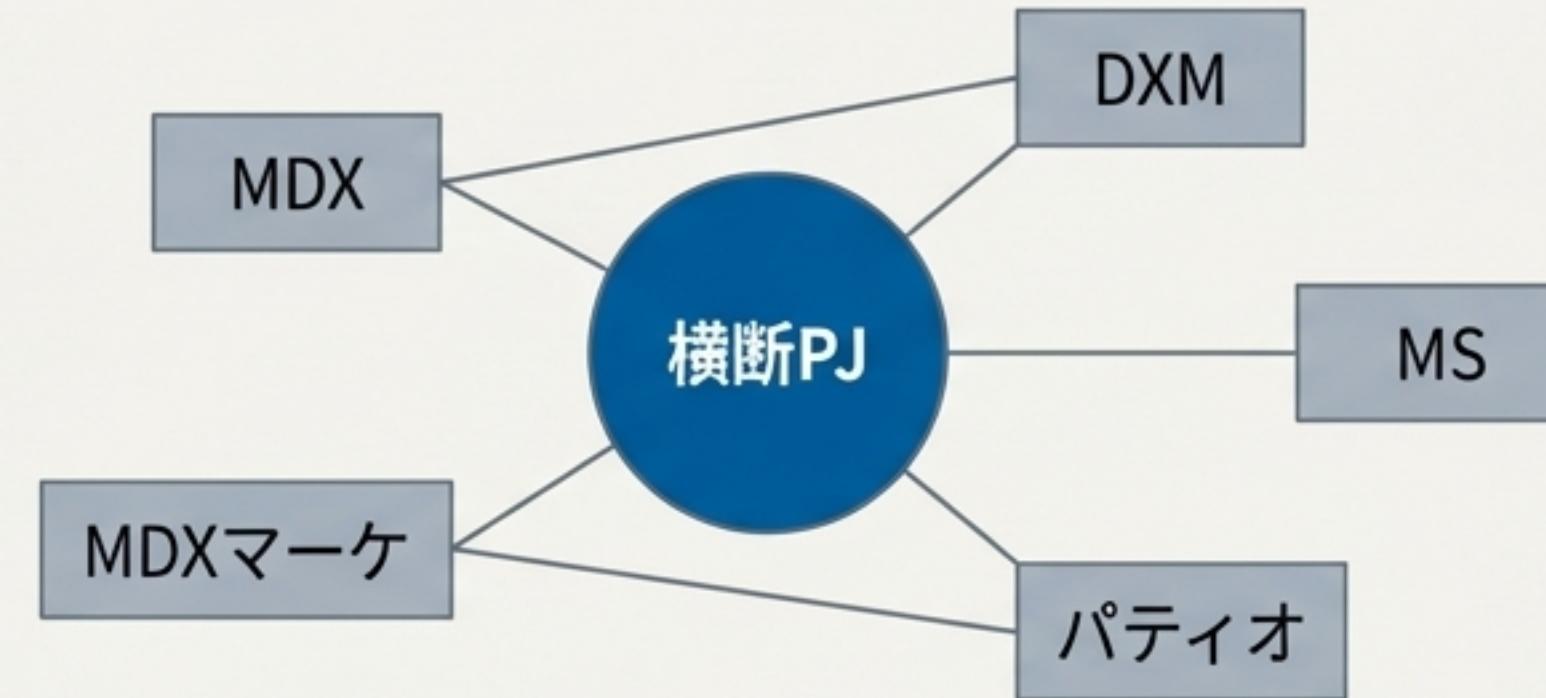


コアライブラリのメンテナーがReactへピボット。我々のプロダクトの根幹がリスクに。

いっそナイルがメンテナーになる。  
`volareinc/laravel-admin`をforkし、自社でメンテナンスを開始。

- **中期的目標:** 公式メンテナーへ
- **長期的目標:** React SPAへの移行 (2年後目処)

# サイロを越える、ナイルエンジニア全社協力体制の構築



- **横断プロジェクト (SQとは別軸)** : DXM、MS等の他事業部と技術協力を行うための専門プロジェクトチームを結成。
- **Vibe Codingの実践** : AIエージェントを全面活用したペアプログラミング/モブプログラミングを推進し、知識とスキルを高速で共有。
- **勉強会・技術ブログの解放** :これまでMDX主体だったナレッジシェアの場を、事業部・職種を問わず全社に解放。誰もが参加・発信できる文化を醸成。

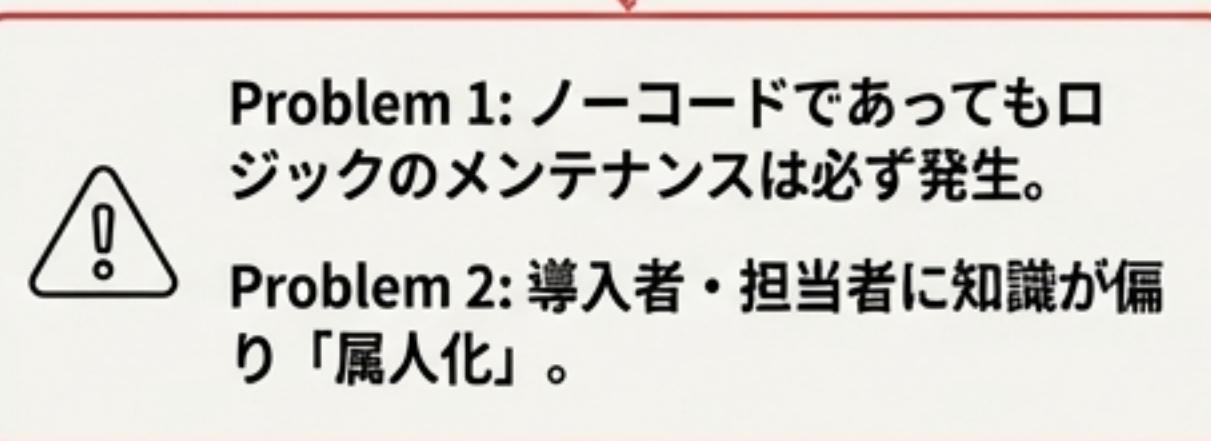
Allocation: SQ業務と横断PJの工数配分は、個人のキャリアプランを考慮しつつ20%前後を想定。

# なぜ「内製」にこだわるのか？持続可能なAI活用の原則

## 「ノーコード」「簡単導入」の罠



現場が手軽に導入



Result: 担当者の異動・退職でメンテナンス不能に。ビジネスや環境の変化に対応できず、陳腐化・利用停止へ。

## 我々のアプローチ



原則、内製開発とする。



エンジニアが設計・開発を主導し、メンテナンス性と拡張性を担保。



輪番制による運用改善で、知識をチーム全体に分散。



Result: ビジネスの変化に継続的に対応する、真に価値を生み出し続けるAI(AIのSDGs)が実現。

# 指針に基づく予算・人員計画



## 人件費・業務委託費

### Stay (予算反映済み)

25年度採用枠の充足（残り1名）は最後まで継続。



## AI開発・利用料

原則内製。外部委託費は発生しない。

### API利用料のみ積み増し（予算反映済み）



## BPO事業化

原則内製。システム化・自動化支援はAPI予算のみで対応。

他部署・他事業部支援で利用するAI利用料もエンジニアUnitが負担。  
「予算がない」を理由に現場のAI導入が滞る事態を防ぐ。

OpenAI (GPT), Google Vertex AI  
(Gemini), AWS (Bedrock).

# 正式な枠組みを超えて：自律的課題解決チーム「NYLE DX LAB」



## コンセプト

- MDX外からの個別相談案件に対応する非公式チーム。
- 来期も継続し、正式なスクワッドミッションの隙間を埋める、機動的な課題解決部隊として機能。
- 正式なプロセス（クエスト起票）を原則としつつ、部署を横断したスピーディな実験と価値検証の場とする。

## 目的

- 全社的な課題発見と、ポトムアップでのイノベーション創出を促進する。

# 新たなMDXがもたらす価値：ステークホルダーへのインパクト

	 経営層	 エンジニア	 他事業部
 「AIといえば ナイル」	全社的な生産性向上、 データドリブン経営の加速	最先端技術スキルの習得、 市場価値の向上	手の届くAIソリューション、 業務効率の劇的な改善
 BPOへの挑戦	新たな収益源の創出、 プロフィットセンター化	ビジネス貢献実感、 事業創造への参画	専門的な技術・運用支援 の提供
 FDE	事業課題への迅速な対応、 市場競争力の強化	課題解決能力の向上、 キャリアパスの多様化	伴走型の頼れる 技術パートナーの獲得

# 我々は、ナイルの未来を実装する。

「かるもーん」の開発チームから、ナイル全社の戦略的エンジンへ。

コストセンターから、事業を創造するプロフィットセンターへ。

受け身の開発から、「これが良い！」と自信を持って提案する  
課題解決のプロフェッショナル集団へ。

This is the new MDX.